

14番テーブル 総評

【メンバー】

内村（立教2）
和田（武蔵3）
斎藤（武蔵2）
佐野（立教2）
野村（早稲田2）
飯田（明治3）
大内（早稲田2）

【テーブルの流れ】

オピニオンプレゼンターには内村のみが立候補し、「脳死者へ臓器移植を強制化して移植待ちの患者を救おう」という主張の元早々に現状分析がスタートした。ASQ では特筆すべき点はなく、20分ほどでNFCへ。

NFC

2つのアイデアを検証した。

1. 菅原の idea 「TGは860人しかいないため×NFC」

内村のQにより、菅原の主張は、TGが少なすぎてmsbに結びつかないため介入すべきではない、ということが明らかになり、そこで内村は「TGの存在は明らかなのだから、他のs/mを受けている人をDATGとして扱い comparison にて決着をつけよう」と提案する。ここに佐野が本当にDAとして扱えるのかという疑問を呈したが、内村がQT comparisonで扱うという手段も提案し、これに菅原も同意した。

2. 野村の idea 「日本国民の23.8%は臓器移植に反対しており、彼らを見捨てることになるため×NFC」

野村の中の23.8%というイメージ観でやや混乱が起こったが、内村の「無視される彼らをDATGとして扱い、comparisonで話そう」という提案で収束した。

その後、内村のプラン、ADを確認したのちソリューション検証へ

SOL

2つのアイデアを検証した。

1. 野村の idea 「ブレスト中に脳死者の家族がそれを遮るため、臓器は増えない」
内村が遮りの成功は絶対的なものなのか、という点から100%の成功率とは証明できないことを主張し、この idea では臓器の増加可能性を否定しきることはできなかったため先に進むこととなった。
2. 菅原の idea 「APA では医者的人数が足りないため OP の臓器の数を増やす方法のみに言及することは適切ではない→プランを追加しよう」
佐野により逆に医者が増える可能性もあるとの主張がなされ、最終的には双方の意見を尊重し医者が足りない病院もあるかもしれないが足りるところもあるためワーカビリティは担保されているという内村の主張により収束した。

内村の AD 立論により、DA 検証へ移る。ここまで約2時間を要した。

DA は菅原の脳死者を TG とした「victim になりたくないが victim になってしまう」という案に決まり、立論された。

AD>DA 検証

内村の「AD は病気から死への変化のため GAP が大きい、DA は脳死から死への変化のため AD に比べ GAP は少ない」という Qlcompari

ここで内村が論点を提示する。

- 1) ADTG は回復可能性があるが、DA にその方法はない
- 2) GAP の大きさに差はあるかどうか

内村の説明により、GAP とは回復可能性があるという期待値(=hope)があるから生まれ、それがあから GAP が生まれるということが明らかとなり、検証ステップに沿って話が進められることとなった。

ステップ1の検証途中で佐野により「DA 側にも生きる方法、延命可能性はあるし GAP もある」という反論がなされた。しかし和田のカンファメーションにより内村にとっての hope は状況をプラスに転じる要素であり、佐野のいう延命はプラスに転じる期待値ではない、という hope への解釈の違いが明らかとなり、場は一時混沌とする。そこで、和田が曖昧になった GAP、hope を捉えなおし、「AD にも DA にも hope(AD:回復可能性、DA:延命可能性)自体存在しないのではないか」と異なるアプローチから反論した。GAP とは要するに s/m を感じているタイミング起点であるため、SQ での ADTG は臓器移植ができない現実がありその時点では回復可能性は見えないし、APA での DATG も同様に延命という手段を選ぶことはできない、という主張であった。これには内村を含めたテーブルメンバーみな納得し、ロジックは不成立、同時に3時間に及ぶ議論が終了した。

【全体コメント】

ほぼすべてのロジックの詰め甘さ（データワラント構成の論理性、書いてあることと主張の不一致等）から本来の意図がテーブルに伝わり切らず進みそうになることも多く、少しもったいなく感じました。そのため、このテーブルでは意図を引き出したり、わかっている情報から自分の視点で意味づけし、それをもとに説得する能力が重要だったのかなと感じます。疲れを感じさせない、和気あいあいとしてとても活発なテーブルでした。5回のディスカッション本当にお疲れさま！

【順位、選定理由】

一位：内村

スピード感、そして握力のある介入でテーブルでの信頼を早々に勝ち取り、ほぼすべてのテーブルの方向決定を行った。また、唯一立候補した OP として安定感のあるプロシーディングを行った点から一位に選定した。早い頭の回転を生かし、これからも活躍して行ってください。

二位：和田

介入量は決して多くはないものの、和田の発言による話の浸透度やコンパリソンにおいて議論の結末を左右する影響力の高い介入が目立ったことを加味し、二位とした。群を抜いたプレゼン能力の高さや、他にはない落ち着いたトーンでの介入を活かした今後の活躍に期待しています。

三位：菅原

コンスタントな介入と、アイデアにより論点を提示し、さらに DA プレゼンターとして議論構築をした点から、三位とした。このテーブルでは独立したアイデアが多かったが、一貫性のある主張を貫くことでさらに議論を深めることができるだろう。

四位：佐野

コンスタントな介入に加え、佐野独自の視点を生かしたダウトでの介入を評価し、四位とした。ダウトを提示し、なおそこから論点抽出や話し方の提示まで行えると、自分のつよみを活かしてよりテーブルを引っ張ることができる存在になるだろう。

五位：野村

証拠に基づいたアイデアの提示を根気強く行った点から、五位とした。自分のロジック

でないときも、自分の意見を持ちどんどん提示して行ってください。

六位：飯田

アトモスは良く議論への参加姿勢は見られたが介入がかなり少なく、これからのチャレンジングな姿勢に期待しています。

七位：大内

わからないときにその旨をテーブルに提示でき、参加する姿勢をととても感じました。さらに自分の意見を持ち、それも提示できるようにしていこう。